

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
主席
研究員17 都市の景観を
考える

日本生産性本部は、働く人が生み出すモノやサービスの付加価値、すなわち労働生産性に関し国際比較を行った。日本の製造業の2015年の労働者一人あたりの生産性は9万5063ドルで、経済協力開発機構加盟35カ国のうち、データの入手できた29カ国中14位。トップのスイスの半分、米国の7割程度にとどまっている。

この原因は、標準化されたパーツの組み合わせで製品を作る「モジュール化」がグローバルスタンダードとなったことと、日本がすべて一貫生産体制による商品づくりに固執す

るあまり、今や世界の潮流となりつつあるスマイルカーブ現象(※1、図)に乗り遅れたことにある。

今や、世界はすべての機器がインターネットでつながるIoTやAI(人工知能)などによる第4次産業革命(※2)の時代に突入している。

働き方改革を含め、あらゆる意味で高い付加価値を生むための改革の断行を推進しなければ、企業はもとよりまちの存続(生き残り)は難しいと言わざるを得ない。(続く)

※1 笑った時の人間の口の形のように、両端が少し上がった形の

曲線。上流や下流が高い利益率を上げる一方、中流の部分は厳しいということ。

※2 世界経済フォーラムは、デジタルな世界と物理的な世界と人間が融合する環境などと定義している。

清水 秀幸氏(しみず・ひでゆき) 1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長

収益性に違いが出るスマイルカーブ

